

# 厚生福祉


 時事通信社

104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 時事通信社  
 昭和28年5月30日 第3種郵便物認可  
 毎週2回火・金曜日発行(但し祝日を除く)  
 購読料金 税抜月額4,100円  
 本誌掲載記事・写真などの無断複写、複製、転載を禁じます。  
 ©時事通信社2020  
 ©誌面内容に関するお問い合わせ(編集部)  
 kousei-dokusha@jiji.com

## 目次

## 日瑞関係余話 その2

元・駐スウェーデン・  
 特命全権大使・渡邊芳樹



2011年11月、首都ストックホルムの公共交

通機関に、あるポスターが溢れていた。それは、スウェーデン(瑞典)駐在陸軍武官小野寺信少将の軍服であった。戦後、武装解除された際にかねて懇意にしていた軍事博物館に寄贈したものである。当時催されていた世界の軍服展において、最も美しい軍服として入り口正面に飾られていた。

小野寺少将は終戦前に独自の諜報網を駆使して終戦工作で活躍、1945年2月のヤルタ会談で「ソ連はドイツの降伏より3カ月を準備期間として対日参戦する」との密約を掴み、本国に伝えたが何ら顧みられなかった。「バルト海のほとりにて 武官の妻の大東亜戦争」(小野寺百合子)に

詳しい。

戦後、小野寺夫妻は日瑞関係の再構築に大変尽力された。各方面へ奔走の末、67年にスウェーデン社会研究所を設立した。開所式にはクリスティーナ王女の来臨を得た。会長には松前重義、理事長には大平正芳両氏が就任、与野党協調の日瑞関係の象徴となった。

百合子夫人は戦中、夫の暗号電を打電するなど重要な役割を担ったが、戦後はスウェーデンの児童文学と社会福祉を日本に伝えた草分けとなった。筆者は93年1月、東京都世田谷区宮坂の自宅でお話を聞く機会を得た。含蓄の深い言葉の中に戦前から戦後にかけてのスウェーデンの高齢者の生

活や、福祉の移ろいと90年代の変容に対する危惧を実感を込めて伝えてくださった。大変な緊張の中で中立を守り通したスウェーデンが戦後は軍事費を福祉に振り向けて、年金を充実させ、救貧院状態の高齢者住宅を次第に見直し、80年代には素晴らしい住環境に仕上げていった。筆者が最初にスウェーデンに駐在した80年代半ばのことだった。その後、金融危機による混乱と冷戦の崩壊、保守中道政権を経てEU加盟、市場主義万能の時代にあつて年金をはじめ多くの福祉が切り詰められていく姿に、時の移ろいを感じておられた。この変容は10年、20年遅れて日本も例外ではなかった。介護保険創設など知恵と国民の協力で乗り切ってきたが、自律(立)と社会的信頼を基本として持続と発展を図るスウェーデンの基本思想にも学びたいものだ。